



今月号では、有限会社坂本造園3代目の坂本利男代表取締役と、長男で入社5年目の坂本友司さんにお話を伺いました。

有限会社坂本造園

所在地 山口市陶 65-1

連絡先 TEL 083-986-2505 FAX 083-986-2518
HP: <https://www.sakamotozouen.com/index.html>

代表 坂本 利男

●会社沿革

昭和初期 創業
平成5年10月 法人化
令和元年 5月 新社屋完成



ホームページ

YAMAGUCHI UEISA



SAKAMOTOZOUEN

●陶で創業、庭一筋で100年以上 (話し手: 3代目 坂本利男さん ※以下、特記のない章の話し手は同氏)

坂本造園は昭和初期に祖父の坂本勲が創業し、100年以上に渡って陶の地で造園業を営んできました。屋号は「植勲(うえいさ)」。初代があって今があるということで、初代の名前に、植木屋の「植」という字を合わせたものです。

一般家庭での作庭が主ですが、旅館や飲食店から依頼をいただくこともあります。「松陰山荘(松田都市開発株式会社 山口保養所)」や「いろり山賊 錦店」など県内一円だけでなく、鳥取県皆生温泉の「やど紫苑亭」など中国地方や九州、関東に出張することもあります。

私が本格的に庭師の道を歩み始めたのは26歳の頃です。高校の普通科を卒業した後は一般企業に就職しました。庭の仕事を継ぐため農業高校などに進学する人がいることを考えると、自分が業界に入ったのは遅い方だと言えます。

当時は庭師になる気はさらさらなかったのです。酒やたばこには目もくれず、どんな天気でも年中働き詰めだった現会長である父の姿を見て「絶対にこんな仕事には就きたくない」と、父のことも、父を縛っているように感じた庭のことも嫌いでした。

しかし、20歳を過ぎた頃、兄のように慕っていた叔父と飲んでいたとき将来の話になり、先を考えていなかったことをひどく叱られたのです。「人が一生を懸けて建てた城の最後を飾り付けるといふ庭師の仕事の素晴らしさになんで気付けないのか!」そして、「親父が庭に捧げた人生を終えるとき『体が弱ったから、よそに頼んでください』とでも言わせるのか!その時の親父の立場になって考えてみろ!」と。



作庭を手掛けた「いろり山賊 錦店」



3世代全員が1級造園技能士を持つのは全国でも約20組と珍しい
(左から取締役会長の坂本光男さん、代表取締役の坂本利男さん、坂本友司さん)

この時の言葉に心を打たれて、平日は印刷会社に勤務し、休日は父親の現場の手伝いに出る生活に変わりました。そして26歳のとき、私は目標を持たないと駄目な性格なので、せっかく継ぐなら「日本一の職人になる」と決めて、父親に弟子入り。さらに「40歳までに自分の名前と屋号を全国に広める」という目標を定めました。

ブランクを埋めるように、あらゆる本や雑誌を読んで各地の庭に足を運び、寝る間を惜しんで勉強しました。そのうち徐々に庭が面白くなり、負けず嫌いな性格も相まって、いつのまにか嫌っていた庭の仕事に没頭するようになっていたのです。

●40歳までに坂本造園の名を全国へ

「40歳までに自分の名前と屋号を全国に広める」という目標のもと、説得力を持たせられる肩書きを作ろうと、様々な大会などに参加しました。「モンドセレクション金賞受賞」などと書いてあるお菓子が美味しそうに見えるように、造園業でもたくさん受賞していれば「この人は上手いんじゃないか」と思ってもらえるのではないかと。

2004年の浜名湖花博には県代表として参加し、出展作品が国際名誉大賞など多くの賞をいただきました。県内でも山口県造園技能大会などで金賞を受賞。とにかく名前を覚えてもらいたい、何らかの足掛かりになれば、と思って取り組んでいました。

そのような活動を見てもらえていたようで、39歳のときにテレビ東京の「TVチャンピオン2」の日本庭園職人選手権の出演オファーが

来ました。日本造園組合連合会という国内で最も大きい組合に問い合わせがあり、そこで自分の名前が挙げられたそうなのです。その番組では優勝することができ、ゴールデンタイムの全国放送だったこともあって、放送後はアクセスが集中して当社のホームページがパンクするほどでした。

日本庭園職人選手権の出演を機に、その後の同局の新番組「チャンピオンズ(2008年放送)」では、ソロモン諸島のガダルカナル島の小学校で作庭しました。一滴の水は無限に広がる海へと繋がることを表現し、散らかしたり、不本意に緑をなくしたりすれば環境破壊を導いてしまうことなどを子どもたちに伝えました。

2019年のTBSテレビ「メイドインジャパン」では、スペインの国立病院で扇形(末広がり)の庭を作りました。幸せや繁栄が終わりなく続くことを願って、末広がり「八」を模した石垣に、水鉢の中心から石垣までは8.8メートルと、設計の全てに意味を込めて作庭。「日本人と和のころ※」と題した巻き手紙に様々な想いをしたためて寄贈しました。

海外での作庭は、苦労が様々ありましたが、それぞれ未来を想い、平和を願った庭づくりをしました。

※ホームページに全文掲載



スペインの国立病院につくった庭

●最年少で技能グランプリ金賞、若手活躍で業界に活気を (話し手: 坂本友司さん)

小学生の頃から雑誌やテレビで現社長である父の姿を見ていて、今思えば子どもながらに憧れを持っていたんだと思います。高校を出た後は福岡にある短期大学で造園を専門に学び、北九州の造園会社で2年間修業を積んでから坂本造園に戻ってきました。



技能グランプリで金賞を受賞した作品



西日本造園技能競技大会に出展した作品

今年は2月に「第32回 技能グランプリ造園職種」、4月には「第1回西日本造園技能競技大会(第15回山口県造園技能競技大会)」に出場しました。

技能グランプリでは事前に材料と枠の大きさが発表され、自分でデザインを決めて、大会当日に制限時間内で仕上げていきます。造園技能競技大会は、石積みの技術を競うもので、事前に発表された図面を基に、規定を満たすものを制限時間内に作ります。

結果として、技能グランプリでは金賞(厚生労働大臣賞)を受賞することができました。金賞を取るつもりで練習は積んでいましたが、いざ結果が発表されると驚いたというのが正直な感想です。手を震わせながら、真っ先に父に電話で報告しました。西日本造園技能競技大会は3回目の出場で、昨年に続き銀賞(県支部長賞)でした。次は金賞を取りたいと思っています。

この業界は、経験を積んで年を取ってからでないと有名になれないような面があると思うのですが、若くても活躍できることを証明したいと考えています。そういう意味では今回の技能グランプリで最年少での金賞受賞となったことは大変嬉しかったです。ベテラン世代の教えをしっかりと受けながら、業界を盛り上げるためにも若い世代を活気づけていきたいと思っています。

●次世代まで広めたい“緑の魔力”

今この業界は若手が本当に少ないです。4月に実施した西日本造園技能競技大会は、元々山口県大会だったのですが、山口県だけではメディアの注目度は高くありません。できるだけ多くの人に参加できるように、興味のある人が参入できるきっかけとなるようにと、西日本大会にするよう提案したのです。次世代の庭師が自由に楽しく庭をつくりつづけられるよう、技術や知識を次に繋げられるようにしていきたいと考えています。

人間が最も心を落ち着かせられる色は緑と茶色、それは森の色なのです。森林浴をすれば、人によってはリラックス感が1カ月続くそうです。それを自宅の庭など身近に持ってくれば、どれだけ心が落ち着くか。

民家でも店舗でも、緑を入れると空間は劇的に変わります。木は四季によって異なる表情を見せ、夏の強い日差しを遮るなど住環境を豊かにしてくれます。そして、木は生きているので家族の記憶とともに成長していくのです。

お子さんがいるご家庭で施工した際には、「春になったら新緑がきれいだな」「秋になったら葉っぱが落ちるんだな」というのを体験して、「日差しから守ってくれてありがとね」とか言いながら、一緒に落ち葉を拾ってくださいね」とお伝えしています。豊かな心を育ててほしいという想いです。

私はこの“緑の魔力”を多くの人に伝え、実感してもらいたいと思っています。そのために木を植えて、次世代に緑を広められるよう子どもたちの原風景づくりをしていきたいです。



2019年に完成した自社社屋に庭をつくる職人たち